第４章
天草の海の歴史を学ぼう！
「棚底城争奪バトル　～島と海は我らが守る～」

１．天草五人衆とは？

戦国時代、天草は天草五人衆と呼ばれる豪族たちが分割して治めていました。天草五人衆とは、天草氏、志岐氏（しきし）、大矢野氏（おおやのし）、栖本氏（すもとし）、上津浦氏（こうつうらし）のことで、敵対したり協力したりしながら争っていました。また当時、現在の熊本県南部にあたる球磨・八代・芦北を支配していた相良氏（さがらし）や、現在の長崎県にあたる島原を治めていた有馬氏（ありまし）とも、天草五人衆は関わりをもっていたことが明らかにされています。いまでは天草五橋で九州本土とも橋でつながっている天草ですが、当時はもちろん橋などなく、八代海や有明海を船でわたり様々な人の交流があったことがわかります。

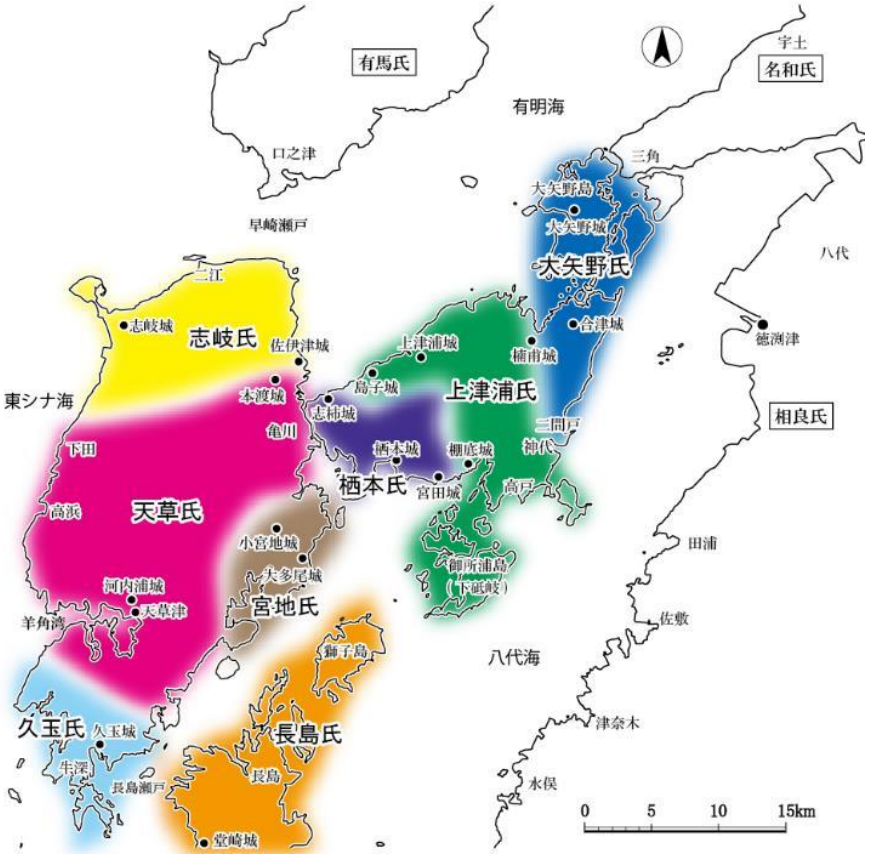
天草五人衆と相良氏・有馬氏

２．天草五人衆と八代海

天草五人衆が争っていた戦国時代、中国（明・みん）との日明貿易は、公的には「勘合貿易」と呼ばれる遣明船に限られ、回数や船数が決まっていました。しかし、表があれば裏があるもの。正式ではない貿易ルートとして、明との交流ができた琉球を間に挟んだ貿易、海賊である倭寇（わこう）による貿易、九州の戦国領主によるひそかな私貿易などがあり、八代海はこれらが盛んだったようです。

八代に進出した戦国大名の相良氏は、八代城を築き、徳淵津という港を整備して、琉球と貿易を行っていました。また1545年（天文14年）には天草・大矢野に中国船（明船）が着き、相良氏は公式遣明船の警護を依頼されるなど、八代海の船の往来は活発になっていました。

相良氏と天草五人衆とは、相良氏の八代進出以降、基本的には主従関係にあったようで、五人衆は祝賀など事あるごとに八代に使者を遣わし、頻繁に通交していました。有明海沿岸を本拠とする上津浦氏が八代海側の棚底城跡を治めたのは、相良氏との緊密な関係を求めてのことと考えられます。　また、相良氏も、天草五人衆が対立した際には軍勢を派遣し、積極的に五人衆の争いに介入していました。八代日記を見る限り、相良氏側は劣勢に立たされている側を援助し、勢力均衡を企図している節があり、八代海の海洋権益をめぐって相良氏と天草五人衆の間には密接な関係にあったと考えらます。



西暦1564年頃の天草五人衆の領域（領域は推定）と相良氏・有馬氏（図提供：中山圭）

第４章
天草の海の歴史を学ぼう！
「棚底城争奪バトル　～島と海は我らが守る～」

３．戦国時代の天草

天草五人衆が活躍する戦国時代、天草で最大の激戦地となったのが、棚底城です。棚底城は、天草で最も高い倉岳（くらたけ・標高682m）に築かれた戦国時代の山城※1で、14世紀から16世紀の後半まで利用されていました。相良氏の家老が残した中世文書「八代日記」には、1544年から1560年まで、天草五人衆である上津浦氏と栖本氏が棚底城をめぐって争いを繰り返したことが記されています。

八代日記によると、15世紀後半（室町時代後期）、八代進出を図った相良氏に天草五人衆の上津浦氏・栖本氏・志岐氏が協力したことが記されており、この時期に相良氏と天草五人衆の結びつきが強まったと考えられています。16世紀に入ると天草五人衆の間の争いが顕著となり、1532年（天文元年）には天草氏・栖本氏・大矢野氏・志岐氏・長島氏が連合で、上津浦城を攻め入ります。この時、孤立した上津浦氏を相良氏が援助し、相良氏は4回にもわたり援軍を天草に渡海させています。

表：棚底城関係年表
（出典：天草市観光文化部文化課作成「国指定史跡・棚底城跡」パンフレット）

棚底城関係年表	
1356年（延文元年）	大権寺に明俊禅尼石塔できる（天草最古の紀年石造物）。
1383年（永徳3年）	大権寺に夫婦石塔できる。この頃築城か。
1532年（天文元年）	天草・栖本・大矢野・志岐・長島氏が連合で、上津浦城を攻める。相良氏が上津浦氏を援助。
1544年（天文13年）	上津浦一族が棚底城から下城する。
1545年（天文14年）	大矢野に中国船（明船）着く。
1556年（弘治2年）	6月　上津浦から棚底を攻め、藤河栫を破る（このころには栖本氏の城に） 11月　上津浦から棚底を攻め、「さかたぬき」を破る。5人討ち取り、53人と牛馬30頭生け捕り。
1558年（永禄元年）	上津浦から棚底城を攻める。
1560年（永禄3年）	2月　上津浦から棚底城を攻める。栖本勢3人討ち取られる。 9月島原の有馬勢の船200隻、栖本攻めのため天草へ。上津浦・志岐・有馬・大村・松浦氏栖本城を攻める。天草で初めて鉄砲が使用された。 11月　相良氏の仲介で、棚底城は栖本氏から上津浦氏に譲られる。有馬氏ら本拠へ帰る。
1565年（永禄9年）	4月　上津浦から栖本を攻め、麦作り追い払う。栖本から棚底へ攻め、麦をオウコ130本追い落とす。
1579年（天正7年）	天草五人衆、島津氏へ帰順。城はこの頃廃城か。

第４章
天草の海の歴史を学ぼう！
「棚底城争奪バトル　～島と海は我らが守る～」

16世紀中ごろになると、天草上島では上津浦氏対栖本氏の争いが激しくなります。1544年（天文13年）、棚底城を占拠していた上津浦氏一族が、なんらかの理由で棚底城から下城しました。その後、ライバルだった栖本氏が棚底城を占拠することとなり、元の城主だった上津浦氏は城を取り返すために栖本・棚底方面へ出兵を重ねたことが記されています。この時期、栖本氏は相良氏と関係強化を図る一方、上津浦氏は島原半島の有馬氏と関係を深め、上津浦氏と栖本氏の対立はますます強まりました。

棚底城跡の案内看板（写真提供：内山隆）

1560年（永禄3年）、栖本城合戦の後、相良氏の斡旋で栖本氏から上津浦氏に棚底城は変換され、再び上津浦氏のお城となりました。
その後、1566年（永禄9年）には、逆に栖本氏が棚底方面を攻め、引き続き棚底をめぐる争いは継続していたようです。しかしながら、八代日記はこの年の5月で記録が終わり、その後の詳細は不明です。

このように、中世の棚底城をめぐる争奪バトルは、天草五人衆の上津浦氏と栖本氏が肥後南部の相良氏や島原半島の有馬氏を巻き込みながら幾度となく繰り広げられましたが、最後の結末は現在も明らかになっていません。

４．棚底城跡

棚底城跡は中世天草の歴史を物語る貴重な城郭として、平成21年7月に国史跡に指定されました。誰もが自由に訪れることができ、看板や道が整備されています。
棚底城跡は、東西340mにわたって、郭（かく）※2と呼ばれる平地がⅠ郭からⅧ郭まで８つあります。発掘調査によって、郭につくられていた建物の柱穴がいくつも見つかっています。通常は、中世の山城跡は戦いの時にのみ利用されるため、柱の穴は簡素な建物の場合が多いのですが、棚底城跡のⅠ郭では城主が住むための立派な建物が何度も立て替えられた跡が見つかり、生活空間として常に利用されていたことが明らかになっています。そのⅠ郭を守るためにつくられた横堀は、三重にも厳重に作られています。これは天草の他のお城にはない特徴的なもので、九州本土の相良氏から伝わった技術ではないかと言われています。

棚底城後のマップ　出展：天草市役所観光文化課作成「国定史跡・棚底城跡」パンフレット

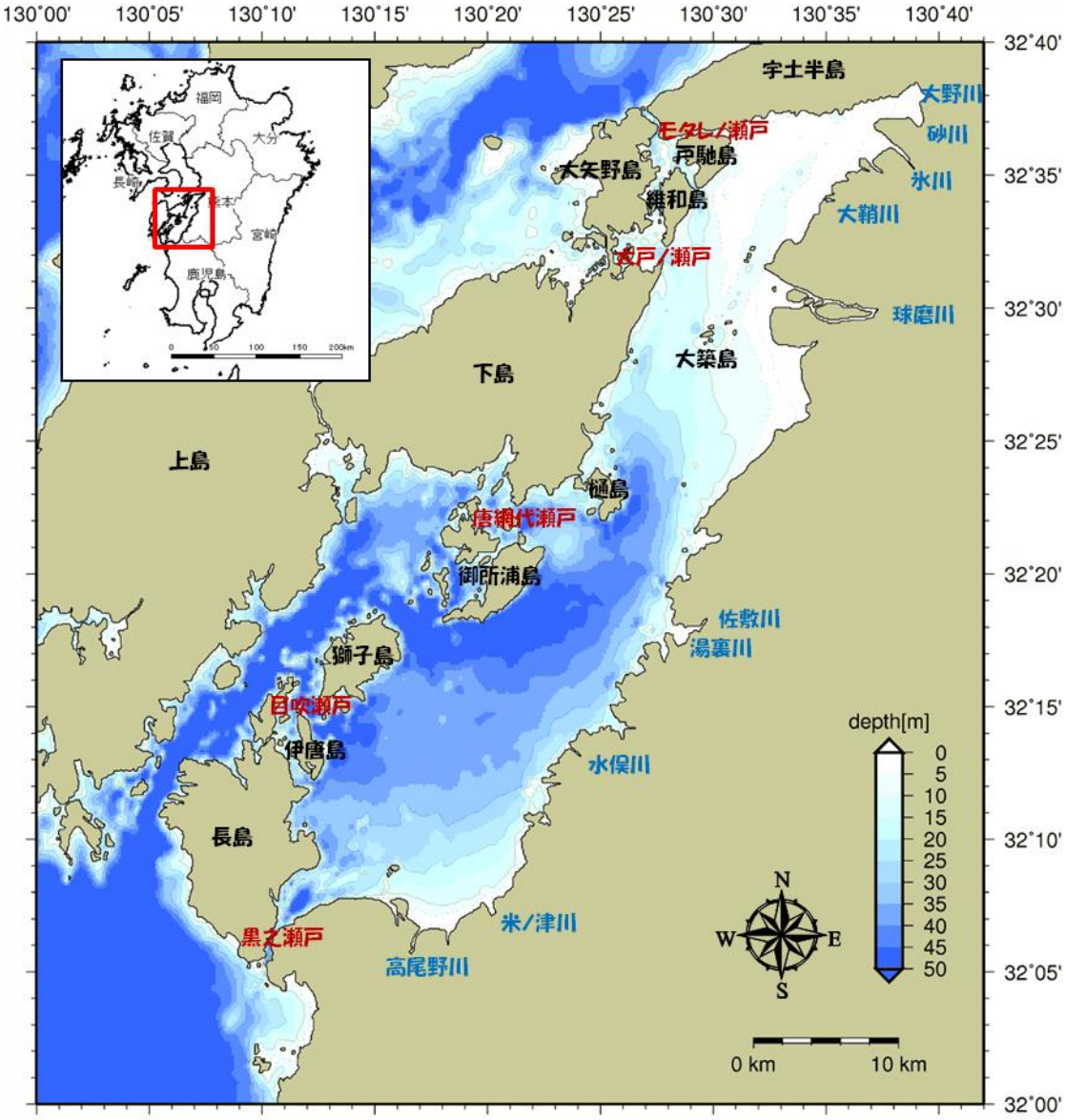
※1山城：山地を利用してつくったお城のこと。※2郭：城を守るために作られた平地のこと。

第４章
天草の海の歴史を学ぼう！
「棚底城争奪バトル　～島と海は我らが守る～」

コラム：環不知火海の歴史を掘り起こす！

八代海は、別名で不知火海（しらぬいかい）とも呼ばれています。不知火とは、旧暦8月1日の深夜、海上に多くの光が点在しゆらめいて見える現象のことです。不知火は、蜃気楼の一種で、大気光学現象だとされています。遠浅の海が続く八代海では、干潟の砂と、流れ込む水路の温度差が大きくなります。その温度差のある空気がレンズとなり、漁船の光（漁火・いさりび）が多数に見える幻視が生まれるとされています。

天草海部では、天草レキバナ会の協力を得て、環不知火海の歴史の掘り起こし、環不知火海文化圏（不知火海の沿岸に共通の生活圏、経済圏、文化圏があったと思われること）の一端を発見しようと、研究会を重ねてきました。最初は、八代工業高等専門学校が取り組む「環不知火海文化交流基盤整備事業（天草石工の活動を通じた環不知火海の歴史と文化）」に着想を得て、水俣城の城壁に天草の陶石が使われたのではないかとの予想のもと、水俣市教育委員会から水俣城の資料を取り寄せ研究会を行いました。残念ながら（？）水俣城の城壁の石はすぐ近くから採掘されたことがわかりました。しかしながら、資料を読み解く中で、棚底城における天草五人衆と八代の相良氏との不知火海を通じた歴史が明らかになり、本歴史プログラムの開発につながりました。今後も環不知火海の歴史を掘り起こして新たなプログラムを作っていけたらと考えています。



八代海（別名：不知火海）の概況（出典：熊本大学「八代海再生プロジェクト」HP）

第４章
天草の海の歴史を学ぼう！
「棚底城争奪バトル　～島と海は我らが守る～」

５．遺物からわかる海外とのつながり

棚底城跡の発掘調査では、柱の穴などの遺構の他に、約2000点の遺物が出土しています。その半数以上にもなる1100点が中国産の青磁や青花（染付）などの輸入陶磁器片でした。

棚底城跡の遺物の中で注目すべきは、ベトナム製の青花碗の破片で、14世紀後半～15世紀中ごろに位置づけられる資料です。棚底城で見つかったものの中でも比較的初期に位置づけられる、古い遺物です。最近の発掘調査でタイ産の陶磁器も出土しました。さらには、自然の石を利用した碁石（ごいし）や天目茶碗・石製風炉など茶の湯道具類も出土しています。これらから、棚底城で豊かな生活が行われていたことがわかります。

輸入陶磁器が国産の土器類より数多く出土している城郭は全国的にも珍しく、九州の西端で、中国と海を隔ててつながっている天草らしい調査成果として注目されています。天草が外洋を往来する船の玄関口として一定の役割を担っていたことが、出土した遺物から読み取ることができます。

棚底城跡から出土した遺物
（図提供：中山圭）

棚底城跡　ベトナム陶磁（写真提供：中山圭）

●参考文献：
天草市観光文化部文化課作成「国指定史跡・棚底城跡」パンフレット
https://www.city.amakusa.kumamoto.jp/kiji0031449/3_1449_2_c2na2kzb.pdf

天草市「史跡棚底城跡整備活用基本計画書」2017.
https://www.city.amakusa.kumamoto.jp/kiji0033341/index.html

中山圭　「周縁の文化交渉学シリーズ4 『陶磁器流通と西海地域』天草における中世の交流―天草の遺跡出土貿易陶磁から―」2011.

熊本大学「八代海再生プロジェクト」HP
http://engan.kumamoto-u.ac.jp/project/index.html

天草・海の冒険サポーターズテキスト
第4章「棚底城争奪バトル　～島と海は我らが守る～」資料集編
■発行：天草海部　■企画・制作：浪崎直子・正角雅代・野間英樹　■執筆：浪崎直子
■協力：天草レキバナ会　青木賢治、中山圭
※本テキストは、2019年度地球環境基金の助成を受けて作成しました。

※本テキストでは、オリジナルを改変しての利用、有償配布、素材の流用を禁止します。